

吉川 晴美

(東京家政学院大)

〈目的〉 少子化、高齢化社会における今日の家族は、「子どもの存在」についてどのような意識をもって生活しているのだろうか。本研究では、幼児の父母と大学生とに調査を実施し、その意識構造の一端を明かにし、現代家族の子ども観について考えたい。

〈方法〉 質問紙調査法(共同作成、実施:藤原なおみ)。「子どもの存在は、家族に新たな目標を生まれさせる」などの23質問項目にたいし5段階評価で回答する。回答結果について因子分析、 $\chi^2$ 検定、残差分析等を行い考察する。回答者は幼児を養育している父母107名、家政学科女子大学生144名、合計251名である

〈結果と考察〉 本調査では父母間の有意な差は殆ど見られなかった。子どもの存在意義に関する意識は、因子分析により、父母の場合、家族の「新生・活性化」、「社会化」、「生活運営」、「安定・存続化」、学生の場合、家族の「精神的発達」、「生活存在基盤」、「内的関係発展」、「外的関係発展」、「安定・存続化」等の因子から成ることが分かり、父母は現実的、構成的特色、学生は認知的、分節的特色を示していることが明かになった。父母は特に、子どもの存在を「家族に新たな目標や生きる意味を与え、責任を自覚させ、家庭内外との交流を活発にさせ、存在そのことで満足である」等と考えている。全体的に父母の方が回答への肯定度が高く、親の立場から子どもの存在意義をより強く実感している様子が分かり、子育てをする過程において親自身の子どもの発達もなされていくと考察された。また子どもが「老後の安心」になるかについては、父母も学生も肯定度が他と比べ有意に低かったのは、現代家族の意識のひとつの側面を象徴しているといえよう。